

ドラブルの“the new ‘her-story’”¹

— *The Red Queen: A Transcultural Tragicomedy* (2004) 考 —

Margaret Drabble’s “the new ‘her-story’”:

A Study of *The Red Queen: A Transcultural Tragicomedy* (2004)

Makiko Kazama

風間末起子

要 旨

ドラブルは、2006年までに17作の長編小説を出版しているが、それぞれに趣向をこらし、実験的な試みを行ってきた。第16作目の *The Red Queen: A Transcultural Tragicomedy* (2004) でも、副題に「文化を横断する、ジャンルを横断する」という趣旨の副題を付けることで、実験的な意図を明らかにしている。

ドラブルは、この副題が小説中で普遍性を提示するために必要だったと語っている。しかしながら、時代を超えて生きる女性とか、普遍的な人間性を有する女性という前提は、文化相対主義のポストモダンの時代には支持されない考え方であろう。そこで、この2つのもの（普遍性と相対性）の共存の可能性を探ったのがドラブルの意図であったと考えられる。本稿では、時代、国、文化を横断するという試みを通して、連続性と不確実性の混在という結論に至る経緯を分析した。以下に小説の構成とあらすじを記しておく。

小説の Part 1 Ancient Times では18世紀の朝鮮王朝のプリンセスの宮廷内の回想、Part 2の1つ目の Modern Times ではイギリス人女性で生命倫理学の研究者 Barbara Halliwell（以下、Babs と略す）の韓国ソウルでの学会の出来事、Part 2の2つ目の Postmodern Times ではイギリス帰国後の Babs の生活の変化、という具合に、小説は時間的・空間的な区分を設けた3部構成となっている。本稿では小説の引用箇所

便宜的に Postmodern Times を Part 3 と明記した。

Babs は 1 年間のオックスフォード大学での研究休暇を終えようとしている時に、送り主不明の書籍の贈り物を受け取る。それは 200 年前の朝鮮王朝の王の息子（思悼世子^{サドセジャ}）の正室、恵慶宮^{ヘギョングン}によって書かれた『回想録』（英語訳）であった。Babs がこの本を夢中になって読むのは、韓国のソウルで開催される学会へと向かう機中である。朝鮮王朝時代のプリンスは墓場から出現した幽霊となって、時代や国を往き来できる存在である。Babs もこの『回想録』を読むことで、知的、精神的に 2 つの時代と 2 つの文化を横断する。要するに、この作品は、200 年の時代の隔たりの中で、古い物語と 21 世紀の現代が交差するという設定の上で抽出できる「女の物語と歴史」の真価を披瀝する試みを行っていると言える。

キーワード：メタフィクション、物語の再構築、ポストモダン、連続性と不確実性

序

マーガレット・ドラブル (Margaret Drabble, 1939-) の第 16 作目の小説 *The Red Queen: A Transcultural Tragicomedy* (2004) を読んだ日本人読者は嬉しい驚きを感じるだろう。なぜなら、この小説は、Part 1 の時代背景を 18 世紀の朝鮮王朝 (李王朝は 1392-1910) から採取し、しかも、小説の基盤となる『回想録』を書いているプリンス (世子^{セジャ}の妃、世子嬪^{セジャピン}) は、日本でもテレビ放映された韓国ドラマ『イ・サン』 (朝鮮王朝の第 22 代国王となる正祖^{チョンジョ}の物語) の主人公の母、恵慶宮^{ヘギョングン} (1735-1815) として登場するからだ。ドラブルはこの実録の『回想録』を種本にして小説の Part 1 *Ancient Times* を創作している。因みに、韓国のテレビ・ドラマ『イ・サン』は 2007 年 9 月 17 日から翌 2008 年 6 月 17 日まで放映されたので、ドラブルの小説はこのドラマ放映に先んじて出版されていることになる。

ドラブルは、2006 年出版の最新作 *The Sea Lady: A Late Romance* まで、全 17 作の小説を出版しているが、それぞれに趣向をこらし、実験的な試みを行ってきた²。今回も、小説に副題 *A Transcultural Tragicomedy* を付けることで、特定の時代とジャンルを越えた作品を作っているという意図を込めている。実際にドラブルは 2006 年の

インタビューの中で、*The Red Queen* について、この小説は、特定の時代や文化の物語ではなく、普遍的なテーマを抱えていると宣言するために、この副題が必要であったと語っている (Lee 492)³。

しかしながら、時代を超えて生きる女性とか、普遍的な人間性を有するプリンセスという前提は文化相対主義のポストモダンの時代には支持されない考え方であろう。それでもドラブルはこの作品を通して、その信憑性を調べ、この小説がその結論となるだろうと考えた。ドラブルは小説の序文の中で、この作品を通して、普遍性や本質主義についての現代の、あるいはポストモダンの時代に生きる我々の疑義について調べ、結論づけてみたいと説明している (*RQ*, Prologue, ix)。結果的に、普遍性と文化相対主義という2つの対立的なものの共存の可能性を探ったのが作家の意図であった。

本稿では、時代と文化の横断という試みを通して、連続性と不確実性の混在という仮説のもと、その結論に至った経緯を、作品分析を通して検証していきたい。

1. 物語の再構築 — メタフィクションを遊ぶ —

ドラブルの小説の多くがそうであるように、この作品でも、「生き延びること」 (“survival”) は小説中に頻発する用語であり、キーワードとなっている。朝鮮王朝のプリンセスにとっても、「生き延びること」は「自分の物語を書き記すこと」であり、しかもその物語をより広く伝えていくことが重要であった。次の引用は小説の Part 1 のプリンセス (恵慶宮^{ヘギョングン}) の宣言である。

I intend to retell my story. I hope to purchase a further lease of attention, and a new and different readership. I have selected a young and vigorous envoy [Barbara Halliwell], who will prolong afterlife and collaborate with me in my undying search for the meaning of my sufferings and my survival. (*RQ*, Part 1 Ancient Times, 6)

生き延びるために (自分の物語を伝えるために)、プリンセスは、21世紀のイギリス人女性 Dr Barbara Halliwell (以下 Babs と略す) を伝達手段として選ぶ。Babs は小説の Part 2 で登場するが、彼女は生命倫理学の研究者で、韓国のソウルで開催される学会 (学会のテーマは “The New Frontiers of Health: Globalization and Medical

Risk') に旅立とうとしていた⁴。その直前に、彼女は 18 世紀の朝鮮王朝のプリンセスの『回想録』(Memoirs of a Korean Queen, 『閑中録』全 4 巻 1795、1801、1802、1805) をインターネットのアマゾン経由で匿名の送り主から受け取っていた⁵。この本は機中で Babs の心を捉えることになる。この回想録は、もちろん恵慶宮の実録の『回想録』(Haboush の英訳) を種本としているが、小説の Part 1 Ancient Times に記されたドラブルの「プリンセスの回想的物語」では、恵慶宮の『回想録』が小説の意図と目的に沿う形で、短縮、脚色、虚構化されている。この『回想録』に取り憑かれた Babs は、プリンセスの『回想録』を伝える「選ばれた器」(“the chosen vessel” RQ, Part 2, Modern Times, 211) となる。実際にこの回想録に触発されて、彼女はソウルのホテルで知り合った韓国系オランダ人医師 Dr Oo Hoi-Chang にプリンセスゆかりの宮殿や、プリンセスの夫、思悼世子^{サドセジヤ}の墓所、水原華城^{スウォンフアソン}の町に案内されることになる。

イギリスに帰国後、Babs はプリンセスの『回想録』を、たまたま知り合った小説家マーガレット・ドラブルに話して聞かせる。ここで作家ドラブル本人が小説上に登場することになる。Babs はプリンセスの回想録や自身の身の上話、ソウルの学会での体験や中国の養女の話など、すべてを作家ドラブルに話して聞かす。Babs は話し終えた時に、プリンセスを適切な受け取り人に手渡すことができたことと安堵している。

このようにして、小説では Part 3 の Postmodern Times の最終箇所ですべての物語が作家ドラブルに引き継がれ、プリンセスの宮廷の物語と Babs の話が再構築 (re-construct) される仕組みになっていることを知らされる。その意味で、この小説は、小説主人公が小説の中で自分の物語を書くというメタフィクションの技法を真似ている。実在の作家 (ドラブル) をフィクションの中に登場させて、その作家がこの物語を書いたという体裁、つまりはメタフィクションの技法をドラブル自身が行うというポストモダンの手法を「遊ぶ」手法を採っている。この手法について、ドラブルは次のように、わかりやすく説明している。小説中で、ドラブルは、小説がある種の剽窃行為であると冗談めかして Babs に警告する。

Novelists . . . are not to be trusted. They steal; they borrow; they appropriate. You should never tell them anything, if you want to keep it a secret. (RQ, Part 3

Postmodern Times, 351)

小説はある種の「剽窃行為」、ポストモダン的な用語で言い換えればバスティーシュ（模倣、写し）であるとの指摘である。ドラブル自身も小説の序文で、「私たちの書いているものは意識的であろうがなかろうが、借りてきたものである。何事もゼロからは生まれない」と言って、模倣という小説の属性を容認する（*RQ*, Prologue, viii）。

Babs も、「あなたの学生は剽窃をするのか？」と知人から問われた時、「するわよ。それに私も剽窃し自分のものにしてしまうわ。私たちはみんな剽窃をするんじゃない？ だって何も無からは生まれないもの。おもしろいから皆が興味をもつのであって、だれが最初に考えたかなんて何の意味があるの？」（Part 2 Modern Times, 234）と答えて、剽窃についての倫理性を茶化している。

ポストモダン的な茶化しは続く。さきほど、本稿の序の部分で、「この小説は、特定の時代や文化の物語ではなく、普遍的なテーマを抱えていると宣言するために、この副題が必要であったとドラブルは語っている」と記したが、この「普遍的」という言葉に 21 世紀の Babs は敏感に反応している。Babs は、プリンセスの『回想録』に感動しているが、普遍的なる事象に癖のように疑問を発する現代人の常として、テキストや自我の絶対性に対して、彼女も型通り、疑義を持つふりを装っている。

She has been brought up in a postmodern relativist world, therefore she cannot believe in direct messages, either from a text or from beyond the grave. Nevertheless, there is some kind of a message, and it is she herself that is receiving it. If she has a self, which is also problematic. (Part 2 Modern Times, 252)

上記は、ポストモダニズムを意識した 21 世紀のドラブルの意図的な声である。

こうして、ドラブルは、メタフィクションというポストモダンの手法、具体的には自分自身を小説上に登場させることで、小説の多層構造と再構築を読者に意識させた。このポリフォニー的な複層性の背後には、普遍性という対立項が見え隠れしている⁶。では次章で、ドラブルの物語の再構築の方法と、その再構築の結果として出来上がった「女の新しい物語」（“the new ‘her-story’” 5）を、これまでのドラブルの小説手法も

視野に入れながら、具体的に分析してみたい。

2. “parallel family story” という機能 — “female narrative voice” を使って —

小説 *The Red Queen* の Part 1 Ancient Times の一人称の語り手であるプリンセスは、20 世紀と 21 世紀に周知の歴史的事実や人物、そして理論用語を使って、18 世紀に生きた自分の宮廷生活を相対化していく。彼女は自分が朝鮮史上の著名な人物として公的には多くの名前を持っているが、実は自分には個人的な名前がないと宣言する。これは 20 世紀後半のフェミニストが女性の社会的立場の象徴として使った表現である。18 世紀のプリンセスは現代のフェミニズム用語で自己を相対化する。

I have no name, and I have many names. I am a nameless woman. My true name is unknown to history. I am famous, but nameless. And I was never a queen in my lifetime, red or otherwise. I became a queen after my death. (*RQ*, Part 1 Ancient Times, 25)

史実的にはプリンセス (1735-1815) は、朝鮮王朝の第 22 代国王の正祖^{チョンジョ} (1752-1800) の生母であり、第 21 代英祖^{ヨンジョ} (1694-1776) の次男の正室であった。彼女の夫はチャンホンセジャ^{チャンホンセジャ}、またの名を思悼世子^{サドセジャ} (1735-1762) とも呼ばれ、彼は政治的謀略と彼の狂気が原因で、米びつの中で処刑された。夫が亡くなったあと、プリンセスは「惠嬪洪^{ヘビンホン}氏」と呼ばれ、息子が正祖^{チョンジョ}として即位 (1776) したあとに王の生母としての敬称「^{ヘギョングンホンシ}惠慶宮洪氏」という名を得た。正祖の崩御から 15 年後のプリンセス自身の死去ののち、「^{ホンギョンビン}献敬嬪」となり、1899 年には「^{ホンギョンワン フ ホンシ}献敬王后洪氏」という敬称も得た。この公的なくつもの敬称を有するプリンセスが小説中で自分の個人的な物語を伝える使者として選んだのが、42 歳のイギリス人女性 Dr Babs Halliwell である。プリンセスは Babs のことを、「彼女はこの時代のプリンセスにちがいない」(Part 2 Modern Times, 173) と言って、Babs を継承者として選び取る。

さて、本稿のこの章の冒頭で、プリンセスが自分自身を相対化していると述べたが、全編を通して、プリンセスと Babs の物語は、「似たもの家族物語」としてパラレル化されている。プリンセスの夫サドセジャは名君を父に持ち、父親の愛に飢えた精神

病患者であった。一方、21世紀のBabsの夫 Peter Halliwellもカリスマ的な人類学者を父に持ち、父の期待に応えることができないまま精神病を患っている。しかも、プリンセスが最初の息子（Prince Uiso）を免疫不全が原因で2歳で亡くしたように、Babsの息子 Benedictも1万人に一人の確率で発症する免疫不全で病死していた。

この小説では、各々の相対化や読み直しは一方的ではない。プリンセスはBabsによって相対化されるが、プリンセス自身も物事を相対化する作業を行っている。プリンセスは「私は今、自分の時代にはない言葉を使っている」(Part 1 Ancient Times, 158) と言って、“postmodern contextualism, enlightenment universalism, deconstruction, concepts of the self” (158) をいう用語を提示し、西洋文明の二項対立の構図や、めぼしい批評理論・概念を明示してみせる。とりわけ物事の相対化と読み直しの秀逸な例は、プリンセスが人間心理の回復の過程を20世紀のフロイト的な手法によって分析している場面である。

プリンセスは、息子（第22代国王、正祖^{チョンジョ}）が生き延びるために行った心理的過程を分析する。息子は米びつの中で殺された亡父（思悼世子^{サドセジヤ}）のおぞましい過去から立ち直るために、侮辱された死人を墓から「掘り起こし、よみがえらせて、深く心理の底に埋葬しなければならなかった」と解釈されている⁷。

I [the Crown Princess] believe that what he [King Chongjo] saw and heard as a ten-year-old child in the hot noonday sun on the day of the Imo Incident affected him so deeply that he felt a deep, unique, personal, filial obligation towards his father's memory. Only by truly reinstating his father could he himself survive as a whole man. He had to dig up the disgraced body, and resurrect it, and rebury it.
(Part 1 Ancient Times, 157) [Underlines mine]

その心理的操作は「内なる普遍的かつ特異な自我」(“inner and unique but universal self” 157) につきうごかされた行動であると分析されている。実際に正祖^{チョンジョ}は、父の亡骸を掘り起こし、新しい墓にその亡骸を移した。このような心理的浄化作用をプリンセスは書き記す⁸。正祖は祖父への怒りの代償行為として父の亡骸を清める。つまり、彼は不愉快な体験を迫体験することで、自分の心を解放させようとする。プリンセス

は、フロイト、ユング、拒食症、円形脱毛症、ヴォルテール、啓蒙思想、自我などの用語を総動員して、心理的回復の行程を20世紀的な分析で読み直そうとする。

もう一つの例をあげてみよう。夫サドセジャの精神的な病についてのプリンセスの洞察である。彼女の解釈は20世紀的な解釈と言える。国王である厳格な父から褒められることなく育った夫の病気を、プリンセスは閉所恐怖症（“the claustrophobia of the court,” Part 1 Ancient Times, 32）と衣服恐怖症（“clothing phobia” 80）、統合失調症（“paranoid schizophrenic” 82）という20世紀の病名を出して理解しようとする。父王の絶え間ない服装への批判によって、サドは狂気、自殺願望、暴力、殺人、吃音、皮膚病、地下室への引きこもりという症状を起こしていく。プリンセスの解釈はもちろん作家ドラブルの意図的な操作であるが、実際に惠慶宮の実録の『回想録』の中に、病気についての先見的な記述があることも事実である⁹。

次に、18世紀のプリンセスの家族の問題（夫の狂気と父・息子の確執）は21世紀のBabsによってパラレル化されていく。もしプリンセスが現代に生きていれば、という想定のもと、Babsの物語は構成されている。

21世紀のイギリスに生きるBabsも、18世紀のプリンセスが抱えた苦悩を共有している。Babsは自分の夫とプリンセスの夫を重ねてみる。Babsの夫Peterはプリンセスの夫サドセジャと同様に、カリスマ的な人類学者の父に叱咤激励され、挙げ句の果てに拒絶された。夫はサドのように宦官の首をはねたり女官を殴ったり、戦争遊びに興じたりはしなかったが、サドと同じように自殺願望と皮膚病に苦しんでいた。Babsの夫は医者から鬱病と診断され（Part 2, Modern Times, 198）、サドは認知症だとプリンセスによって解釈されている（Part 1, Ancient Times, 137）。

このように、病気、狂気、父・息子の確執、遺伝、母性愛、死は2つの時代と文化の中で並置されていく。

Babsは、プリンセスと自分との違いは、夫の狂気および息子の死という共通性にもかわらず、現実の苦悩から距離をおく自由度があることだと、両者の相違を明確化している。Babsは、プリンセスと違って、選択の自由と移動の自由を手に行っている。このように、Babsは、物語の再構築や読み直しのためにパラレル化や相対化を行っているが、彼女は物事を多元主義の言説で放置するのではなく、むしろ彼女が結論づけたものは、相対化によって確認できる普遍性の存在（“universal element,”

Part 2 Modern Times, 214) であった。

Irrationality, sickness, cruelty and violence may not be relegated to the dark backward and abysm of history. (Part 2 Modern Times, 187-188)

ドラブルの初期作品 *The Waterfall* (1969) では、19 世紀小説の読み直し作業として、主人公の Jane Gray が創った物語が 19 世紀小説と相対化されたり、2 つの人称（一人称と三人称）による Jane の物語を並置することで、自由意志と運命、および事実と虚構の不安定な境界線を確認し、その対立ではなく、両者の和解を試みようとした。

The Red Queen では、本稿の第 1 章でも眺めたように、ポストモダンのメタフィクションの手法を前提として、18 世紀の朝鮮王朝で起こった事件の「読み直し」を 21 世紀の Babs を通して行っている。その目的は事件の相対化であり、そこから得た結論は、プリンセスが時代の先取りをしているという Babs の驚嘆である。つまり、プリンセスが人間に内在する普遍的な精神の闇を時代に先んじて察知する能力を持っていた事実から、ポストモダンの手法（ポリフォニー的な多層性を包含する物語の再構築）を使いながら、逆説的に“universal element”の存在を認識しようとしているわけだ。ドラブル自身も、この小説が書かれた目的は、普遍的な物語の可能性を探るためであると述べている。（“Writing for Peace” 221）

さらに、ドラブルは、種本として使った恵慶宮の『回想録』（英語訳）そのものの魅力について、それは“the female narrative voice”であると言っている（Lee 482）。その「女の語り」とは、例えば、プリンセスが「赤い絹のスカートを欲しかった」といった個人的、あるいは家庭の些事を描いていることを意味している。そうした記述は、単なる歴史的史実とは違って、物語に生彩を放つ手法であるとドラブルは考えている（Lee 482; Drabble, “Writing for Peace” 222）。なぜなら、「赤い絹のスカートが欲しかった」（*RQ* 3; Haboush 62-63）という記述は、女性の虚栄心やもろさ、逆に強さを説明する糸口になるからだ（Abbe 21-22）。

実録の『回想録』の中の「語り」が本物であると読者が感じるの、子供っぽい憧れをふと語り、それが家族の不幸へと波及していくと予感する、その日常性と運命の

リアルな合体の中にある。個人的な好みや気まぐれ、虚栄心、そして如何にその虚栄心が人生を左右していくかなど、些事と運命の接合点を通して、読者は「凡庸な人生に同座する悲劇」という逆説的な事実に納得していくのである。

ドラブルは、朝鮮のプリンセス（恵慶宮）と同時代のイギリス人作家ジェイン・オースティン（Jane Austen, 1775-1817）を引き合いに出して、女性作家の偉業がなぜ目につきにくいのかを説明している。オースティンは小説の世界で偉業を成し遂げたにもかかわらず、もし彼女が自分の業績について語ったならば、せいぜい「私はイギリスの新しい家庭小説を創作した」という程度のことしか言わないだろうと推測する。男性作家のように「私は新しい芸術形態を生み出した」というような大仰なことは決して言わないだろうと諧諷をまじえて語っている（Lee 485）。

オースティンもプリンセスも束縛や制限の多い時代を生きた女性であるが、書くことによって、「静かなやり方で」（“in a very quiet way” 485）、豊かな才能を示した芸術家であったということである。なぜ読者が二人の書いた物語に感動するのかは、上記に示したように、両者が人の心の機微を巧みに描写し、それを人生と接合させた技量のほどであった。

ドラブルの *The Red Queen* に戻ろう。例えば、次の場面を取り上げてみよう。「人は愛されることを求めて生きる」という凡庸な事実を、プリンセスはサドセジャと父王との対話の中で率直に伝えようとする。

Prince Sado explained himself to his father [King Yongjo] in these words: ‘It relieves my suppressed anger, sir, to kill people or animals.’

‘Why is your anger aroused?’

‘Because I am so hurt.’

‘Why are you so hurt?’

‘Because you do not love me, and also I am terrified of you because you constantly reproach and censure me. These are the cause of my illness.’

(*RQ*, Part 1 Ancient Times, 92)¹⁰

プリンセスは、父王とサドの会話の子細を描写して、歴史ではすくい取れない人間の

魂の物語を作り上げようとしている。ドラブルは、夫サドセジャの狂気が彼の落ち度ではなく、父王への恐怖から生じた病気だとプリンセスが実録の『回想録』の中で断言していることに深い感銘を受けたと語っている (Lee 492)。『回想録』の英語翻訳者の Haboush と Choe-Wall も、プリンセスが『回想録』に書き込んだ心理的洞察力を指摘している (Haboush Intro.15; Choe-Wall Intro. xiii)。21 世紀の私たちは、虐待された子供の心の傷を癒すために、「あなたは悪くない」と言い続けるセラピストの言葉を熟知している。こうした意味で、ドラブルも宣言しているように、この物語 (『回想録』を種本としたドラブルの RQ) は特定の時代や国の物語ではない。つまり、“It’s a universal story” (Lee 492) なのである。

3. 連鎖の機能 — 小箱のイメージ —

ドラブルは 2006 年のインタビューの中で、「私たちは人と出会った瞬間に、もはや人を他人とは考えられなくなる」(Lee 497) と述べて、人とのつながりを重視する態度を明確にしている¹¹。他者とのネットワークは *The Middle Ground* (1980) でも母性との連結によって強調されていた。母と娘は両者の境界が曖昧であるので、分裂や分離を強調しないし、それを恐れない。むしろ、女性は他者との連結の中で自分を捉えることができる¹²。

The Red Queen では、小箱のイメージの連鎖が頻発する。まずはサドセジャが処刑された米びつである。サドは王位継承にまつわる宮廷内の策略と、父王との確執から生じた精神病が原因で、“rice chest” に監禁され、8 日後に死亡する。米びつという「閉所恐怖症」(“claustrophobia,” RQ, Part 2 Modern Times, 185) のイメージとメタファーは 21 世紀の Babs に引き継がれていく。

ソウルのインチョン空港で、Babs は韓国系オランダ人の医師 Dr Oo のスーツケースを間違ってホテルに運んでしまう。カリスマ的な学者 Jan van Jost 教授の学会の基調講演のタイトルも、「鉛の小箱 — 明かされることについて」(“The Leaden Casket: Meditations on the Apocalypse,” Part 2 Modern Times, 212) であった。Babs はこのタイトルから、Jan 教授を米びつで亡くなったサドセジャに結び付け、“He is the Prince of Mournful Thoughts, the Prince of the Leaden Casket” (Part 2 Modern Times, 243) と名付ける。実際に Jan 教授は家庭の問題を抱えている。しかも、彼はソウルのホテ

ルで心臓発作で急死する晩に、「たくさんの引き出しのついた小さな漆のキャビネット」を Babs にプレゼントしている (Part 2 Modern Times, 300)。引き出しの中にはさまざまな文具品と彼の住所や電話番号、e メールアドレスのメモも入っていた。教授は、「小箱というテーマが僕は好きなんだ」(301) と言って、小箱の連鎖を意図的に行う。

小箱のイメージはもちろん、サドセジャの死から連想されるように、閉塞感のメタファーであるが、同時に開放の意味合いもある。まずは Babs が間違えてホテルに運んでしまったスーツケースがその例である。彼女は初めは自分のスーツケースが盗まれたと思うが、すぐに自分が間違えて他人のスーツケースを運んでしまったことに気づく。この瞬間に、彼女は自分のフレームから飛び出していく。この場で、スーツケースの持ち主 Dr Oo の親切な対応に接することで、彼女は人との障壁を取り除く。「だれもがそうした体験をした時にはわずかに違った人間になるものです。そうした時に何かが起こるものです」(Lee 495) とドラブルは、スーツケースというフレームを使って、そこから抜け出ていくイメージを Babs に適用していることを明かしている。

次は Jan 教授が Babs にプレゼントした「小さな漆のキャビネット」である。学会の開催中に Babs と Jan 教授は 3 日間だけの恋愛関係を持つが、その引き出しに入っていた Jan の住所のメモによって、Babs の人生は不確かなままではあるが、広がっていく (RQ, Part 3 Postmodern Times, 339)。

もう一つの例は、苦悩への Babs の対処の方法である。それは、Jan 教授が死の直前に打ち明けた中国人の孤児を養女として買うことについてである。逡巡の末、Babs は結局、起こった事件や事柄は無関係で非連続的な事象にすぎないと見なすことができない。Babs は、Jane Gray (*The Waterfall*, 1969) や Kate Armstrong (*The Middle Ground*, 1980) のような女性人物と同様に、母性や子供という手段を通して、人との連結、ひいては「育む」「生き延びる」「共感する」というメッセージを送り続ける。Jan 教授のバルセロナの妻 Viveca (“this unknown mad woman, the last wife of Mr Rochester,” RQ, Part 2 Modern Times, 287) に手紙を送る決意をするのも人との連結へのステップである (Part 3 Postmodern Times, 339)。

Babs は Jan がやり遂げなかった意思を実行に移す。Jan の妻 Viveca と協力しなが

ら、中国で養子縁組の話を進めていくのである。やがて二人は2歳の養女 Chen Jianyi の養母となる。この子は中国のバス停にビニール袋の中に捨てられていた子供である。幽霊となって浮遊するプリンセスもこの子供を見つめながら、「彼女の新たな後継者を満足げなまなざしで見つめている」(Part 3 Postmodern Times, 343)。この娘は3番目のプリンセスとなるのである。Babs と Viveca もこの子供を見ながら、「It is a miracle. This child is a survivor.」(343) との直感によって、連続性を予感する。

この筋の流れに沿えば、学会の最中に3日間の恋愛関係を Babs と持った Jan 教授は、18世紀の王になり代わって、現代の学会の王として Babs に子供という遺産を残した、と解釈することも可能だろう。Jan が与えた小箱の引き出しは Babs の人生の眺望を広げ、中国人の養女という後継者によって世代の継承が約束される。Babs は、この子にとって、多言語、多民族、多文化を標榜する21世紀がよい時代であると樂觀的な推測をしている (Part 3 Postmodern Times, 343)。同時に、Babs はこの子を “The universal, essential, patient, driven, unique, determined self” (342) と解釈する。普遍的であり独自の自我は、多様性や複層性の21世紀にも共存し得るというメッセージであろうか。あるいは、ポストモダンを意識して、19世紀的な自我のイメージを持ち出した言葉遊びと取れなくもない。ドラブルのメッセージはここでは読み取りにくい。

このような連結・連鎖によって、時代や文化の連続性はあり得るのだろうか。Babs は、連続性を肯定しながらも、他方で、「過去と現在、ソウルとロンドン混じり合わない。しかし共存する」(Part 3 Postmodern Times, 333-334) と言って、連結の鎖を断ち切る発言もする。「昔と現在は螺旋階段のように、共存するが、ふれあわない」(337) とも言って、両者の連結を否定し、むしろ非連続性を強調しようとする。“They are simultaneous but discontinuous.” (337) が Babs の出したもう一つの回答でもある。

このように、小箱や引き出しが連続性や開放という含意の中で解釈できる一方で、非連続性という想念も Babs は持ち続けているようだ。そこで、我々は「閉じる」というメタファーについても触れるべきであろう。小説の最後の場面で、Babs はソウルで Jan が買ってくれた安物の赤いソックスを自宅のタンスの中に見つける。一瞬、Babs はこのソックスを養女にあげようかと考えるが、結局、考え直して、ソックス

を引き出しの奥に丸めて隠す。この場面の「閉じる」イメージについては、次の最終章で詳しく触れて、本稿の結論としたい。

4. 結び — 連続性と不確実性の混在 —

本稿の第3章「連鎖の機能」の終わりの部分で触れたが、Babsは小説の最後の場面では、Jan教授がソウルで買ってくれた安物の赤いソックスを引き出しから出してみるが、それを再び引き出しの奥に隠してしまう。

この小説が、ソックスをしまい込み、隠すという行為で終わっているのは、物語は完結しない、オープン・エンディングであるというサインであろう¹³。この未決定を提示した理由は何なのだろうか。

結論から言ってしまうと、*The Red Queen* では、連続的なもの（普遍性、繰り返し）と不確定なものは混在しながら、私たちの前に提示されている、ということであろう。ダブルはインタビューの中でも、「物事はほとんどが果てしない繰り返しだが、非常にゆっくりではあるが、進歩していることも事実だ」（Lee 495）と言って、繰り返しと変化の両立を示唆している。

The Middle Ground (1980) のKateの場合は、不確実性（運命と言い換えてもいいが）に脅えず、公式に頼らないで、むしろ不確実性を楽しむという結論を出していた（MG 226）。Babsには、不確実性を楽しむ余裕がない。なぜならBabsは一人息子の死を経験し、Kateよりも苦悩が深いからだ。

同じように不確実性の前で身動きの取れないJan教授がBabsを解決の突破口にしようと考えている。Janは、中国人の子供を養女として買い取るという問題への答えを求めるのである。彼は、「捨てられた子供を5000ドルで買う」（RQ, Part 2 Modern Times, 275）という倫理的な問題に直面している。彼は、「あなたは不確実性（“uncertainty”）や不可避性（“fatality”）について知っているから教えてほしい」（305）と懇願する。彼がこう言ったのは、Babsの学会での発表題が「運命によって死ぬこと — 不確実性と運命」（‘Dying by Lot: Uncertainty and Fatality’）であったからだ。Babsの学会発表は、幼い息子が誤った投薬治療のために死亡したことからヒントを得ているが、判断や選択に迫られた時にくだす人間の選択の曖昧性と危険性を生命倫理学の立場から問いかけた内容である。「生きるも死ぬも運命次第」（276）と

いう思いが、Babs の心理的背景にある。

Jan 教授はもちろん、自分が持ちかけた難問に正答がないことを承知している。大きなリスクを犯してまでこの中国人少女を養女にしようとする理由を、彼は次のように説明する。

‘The child looked at me,’ says Jan van Jost.

This is an extraordinary thing for a man to say. It silences Babs.

(Part 2 Modern Times, 304)

Jan はアカデミックの世界の王であるから、18 世紀の朝鮮王朝の国王の平行的存在となる。王が跡継ぎの王子を残すように、Jan も Babs に子供を残して急死する。

しかしながら、Babs はポストモダンの世界の人間として、2つの時代の連結や類似性を安易に受け入れることができない。Babs にとって、プリンセスは“a self-serving and unreliable narrator” (Part 2 Modern Times, 252) であったし、プリンセスとつながっているという感覚も「幻想」であることを知っていた。友人の Polly が指摘するように、Babs が中国の子供に責任を感じるの、亡くなった息子への代償行為であったのかもしれない (Part 3 Postmodern Times, 326)。死に際に、自分を見つめなくなったその息子のまなざしを取り戻すために、Jan が見たという少女のまなざしに惹かれたのかもしれない。Babs には何も確かなことはわからなかった。どこを歩いても、何を見ても答えは見つからない。少なくとも、テキストではドラブルは、Babs に答えを提示しようとしな。Babs は立ち上がって前を歩き続けるだけである¹⁴。

Jan の遺言としての養子縁組の問題に着手するために、Jan の妻に手紙を書くに至った Babs の心理は、テキストには明確には書かれていない。次のような季節の移り変わり、Babs の行動が重ねられているのみである。

The white flakes drift, and fall, and rest, and melt, and vanish. She sits, as the seasons change. Spring comes, slowly, and menace of the bleak walkway slowly vanishes under foliage and wild flowers. She rises, and walks onwards. She walks,

and walks, and walks, through the hours, and through the days, and through the weeks. From time to time, she watches the children play. Then, one day, she goes home, and writes a letter to Viveca van Jost in Barcelona. (Part 3 Postmodern Times, 338-339)

季節が変化していくように、ゆっくりとではあるが、物事は前進している。だから Babs も立ち上がって歩き始める。Babs と Viveca は不確実性の中に飛び込み、危険を冒す行動に出る。二人は自分たちの行動が引き起こす結果も、その後のことも何もかもわかっていない¹⁵。

結局、Babs の物語には終わりが無い。引き出しの場面はその未決定を書き記すためだったと言える。プリンセスも言うように、物語に終わりは無いし、歴史の中で完結したように見えるプリンセス自身の物語も続いていく。例えば、英祖ヨンジョが献辞した息子サドセジャへの墓碑銘が発見されたという新しい情報も物語には付け加えられる。プリンセスも先週、インターネットでそれを見つけたと言っているように、物語には常に何かが付加えられ、変化しながら継続していく (Part 1 Ancient Times, 165)。言い方を変えれば、未確定や不安定な感覚は先へと進むことと継続への合図でもある。

このように、あとから振りかえれば、自分で選んだと思った道も、繰り返しや連続性という凡庸さの中に埋没してしまうが、それでもドラブルが言うように、「物事はほとんどが果てしない繰り返しだが、非常にゆっくりではあるが、進歩していることも事実」(Lee 495)なのである。この繰り返しと変化の両立は、“universal element” (RQ, Part 2 Modern Times, 214) と不確実な要素の並列、Babs の場合は“survival”の表象と楽観的な将来展望の並列でもある。

19世紀の作家トマス・ハーディ (Thomas Hardy, 1840-1928) のヒロイン Tess が、人間は歴史という連続性の中の単なる駒に過ぎないと恋人 Angel Clare に嘆いた場面がある。

“Sometimes I feel I don't want to know anything more about it than I know already. . . . Because what's the use of learning that I am one of a long row only — finding out that there is set down in some old books somebody just like

me, and to know that I shall only act her part; making me sad, that's all. The best is not to remember that your nature and your past doings have been just like thousands' and thousands', and that your coming life and doings'll be like thousands' and thousands'." (*Tess* 153-154; ch.19)

ハーディは連綿と続く繰り返しの歴史の中に一縷の希望や進歩を見ろという方法を Tess に教えることはなかった。ハーディは Tess の人生の大半に宿命論の暗い影を落としている。しかし、そのハーディも、いつの日か徐々に盲目の意志が目覚めて、この世の絡まった糸がほぐれる時がやってくるという改良主義 (evolutionary meliorism) を、第 6 詩集 *Late Lyrics and Earlier* の 'Apology' (527) で表明したし、*The Dynasts* (1903、1906、1908) の中でも明らかにしている。これは、厭世主義という単純なレッテルを貼られることへの彼の抗議でもあった。

ハーディが *The Dynasts* で語ったように、Babs も、黙示録的なアリュージョンを使って、すべてのパターンがいつか解き明かされる日が来るのかもしれないと表現する (*RQ*, Part 2 *Modern Times*, 216)。Babs はそれを実際に信じてはいないが、彼女が信じていることは、あり得ないことさえも希望できる人間の強靱さである。人間が出来ることは、プリンセスがしているように、ただ信じて落胆しないことのみだ (216)。

継続する物語のその先が未定であり続けるためにも、Babs の赤いソックスは引き出しの奥にしまっておかれる必要があったと言える。その意味で、この小説は普遍的な人間性や歴史の繰り返しを肯定しながらも、不確定と未決定の運命に身を委ね、その中に不安とともに希望も見ている作品と言える。これが、ドラブルの今のところの回答、つまり "ancient times" と "postmodern times" の和解策と言えるし、彼女の創作したメタフィクション、「女の新たな物語」を通して生み出した結論と言える。

(本稿は本学の 2010 年度研究助成金による研究成果の一部である。)

註

- 1 Margaret Drabble, *The Red Queen: A Transcultural Tragicomedy* (London: Viking, 2004) 5. 以下、本稿中のドラブルの *The Red Queen* からの引用は全てこの版に

依る。

- 2 例えば、*The Waterfall* (1969) では、19 世紀小説の読み直し作業として、一人称と三人称の語りをひとりの人物に使用した。また、*The Middle Ground* (1980) では、異文化理解や異文化に属する人間同士のコミュニケーションは不可能であるという前提の上で、コミュニケーションの無力化を補うために、ドラブルは、人との関係性の中で重要なキーワードとして‘care’という概念を取り入れて、他人の視点に立ってみる。つまり、ドラブルは、この作品で、視点の複数化を試みた。語りと視点の複層化や他者とのネットワークを通して、大都会ロンドンの中で人種、文化、宗教、ジェンダー、階層が混じる構図をコラージュ模様（関係のないものが隣り合い、同時にそれぞれの個性を失わずに、互いの接点も見つけようとする都会の共同体のイメージ）として肯定的に見ようとする。

拙著『フェミニズムとヒロインの変遷——ブロンテ、ハーディ、ドラブルを中心に』（京都、世界思想社、2011）の第4章の2項（127-145）と、第5章の3項（192-216）を参照。

- 3 ドラブルは、インタビューの中で、文化相対主義の時代に生きる私たちは互いを理解しようとするのが大切であるが、果たしてそのようなことは可能なのか、について、この副題を通して問いかけたかったと述べている（Lee 479 & 492）。ただし、*NY Times* の書評では副題の意図は果たされていない、と辛口のコメントがなされている（Eder 15）。
- 4 ドラブルは、2000 年 9 月に韓国ソウルで開催された文学の学会“Writing Across Boundaries”に招聘された。また、2005 年にソウルで開催された学会“Writing for Peace”にも招聘されている。この学会については次の 2 つの論文に詳述されている（Miyoshi 209-213; Drabble, “Writing for Peace” 215-225）。
- 5 恵慶宮^{ヘギョングン}は、1762 年に起こった夫思悼世子^{サドセジャ}の米びつでの処刑の事件が後世の人々に正確に伝わるために『回想録』を書いた。事件の記録は息子の正祖^{チョンジョ}の希望で、洗い流されてしまったので（当時は墨で書いた文字を水で流して消した）、恵慶宮は夫の死の真相を、王となった孫の純祖^{スンジョ}（1790-1834）に伝え、残したいと考えたと実録の『回想録』の中で述べている（Haboush 241-242）。
- 6 ポストモダニズムについては、下記の拙書に詳しい。

- 拙著『フェミニズムとヒロインの変遷——ブロンテ、ハーディ、ドラブルを中心に』の第2章の3項49-66、第4章の2項127-145、および第5章の3項192-215を参照。
- 7 恵慶宮の実録の『回想録』の中でも、正祖は亡父の死の記憶と苦しみにとりつかれていたため、父の再埋葬の計画を何年もの間、考えていたことが記されている。正祖は、父の墓を水原スウォンの華山ファサンに移し、その周辺に城壁を築城し始め、3年近くをかけて華城を完成させた (Haboush 201-205)。
 - 8 心理的浄化作用については、Bokatの研究書に詳しい。ここでは、作家が子供の頃に負った心の傷を癒やすために、“repetition compulsion”（繰り返しの衝動）という方法を自分の作品を手段にして試みる心理的浄化作用について詳述されている。
 - 9 恵慶宮の実録の『回想録』にも、サドセジャの病気についての記述がある。サドの閉所恐怖症については、サドが宮廷での生活に息苦しさを感じていたため、頻繁に宮廷を抜け出たり、お忍びの旅をしたことが記されている (Haboush 299 & 301-302; Choe-Wall 77, 80-81)。衣服恐怖症については、父王がサドの服装に常に難点を見つけ非難したために、サドは“clothing phobia”を患っていたと記述されている (Haboush 275, 281, 289, 293, 308, 311; Choe-Wall 60, 65, 69, 71-72, 75)。統合失調症については、サドが如何に父王を恐れ、その恐怖がフラストレーションとなって精神的均衡を失い、多重人格的になったかが記されている (Haboush 246-266; Choe-Wall 51)。自殺願望 (Haboush 269, 272, 285; Choe-Wall 54, 56, 65, 67)、暴力・殺人 (Haboush 12-13; Choe-Wall 55, 57, 65, 75-76, 78, 80, 89-90)、吃音 (Haboush 250; Choe-Wall 54)、皮膚病 (Haboush 296)、地下室への引きこもり (Haboush 314; Choe-Wall 90-91) についても記載されている。
 - 10 実録の『回想録』にも、この場面（父王とサドセジャの対話）の記述がある (Haboush 287; Choe-Wall 71)。
 - 11 他のインタビューの中でも、ドラブルは同じ趣旨のことを述べている (Hardin 291; Preussner 575)。
 - 12 拙著『フェミニズムとヒロインの変遷——ブロンテ、ハーディ、ドラブルを中心に』の第5章の3項196-200を参照。

- 13 引き出しの描写は、*A Summer Bird-Cage* (1963), *Jerusalem the Golden* (1967), *The Needle's Eye* (1972), *The Realms of Gold* (1975), *The Radiant Way* (1987) でも繰り返されている。
- 14 ドラブルは、この小説の中でプリンセスの実際の『回想録』を種本として“adopt”（借用）したが、同時にもっと問題視される行為、中国人の孤児を金銭によって“adopt”（養子縁組）するという21世紀的な問題をも挿入させたと述べている（“Writing for Peace” 223）。
- 15 ドラブル自身も、養子縁組の問題に足を踏み入れることが作家としてリスクを背負うことだと認識している。安全なフェンスの中にとどまることだけが平和のために書くことではないとも言っている。ドラブルは、“cross-culture”の問題に取り組む時の姿勢と覚悟を明言しているわけだ（“Writing for Peace” 224）。また、小説中のBabsは、ロンドンに帰国後、自分の専門分野の本を完成させる。その本のテーマはNHS（National Health Service, 国民医療保険制度）のトリアージ（“triage”）についてである（RQ 346）。トリアージとは、大惨事の際に医療資源が限られた非常時に、治療の順位をつけて選別していくことである。中国の孤児を買い取るという行為は、Babsにとって、危険と混迷を背負い込むトリアージの行為であったと言える。

付記すれば、英祖ヨンジョは孫の正祖チョンジョを、10歳で夭折したサドセジャヒョジョンセジャの兄、孝章世子（1719-1728）の養子とし、実父サドセジャ（犯罪者として死亡）から切り離した（Haboush 2 & 332）。

Works Cited

- Abbe, Elfrieda. “The Margaret Drabble way: In an age of pared-down prose the author’s richly layered novels abound with metaphors, multiple points of view and writerly asides.” *The Writer*. Vol. 119 (1). Jan.2006: 20-23.Print.
- Bokat, Nicole Suzanner. *The Novels of Margaret Drabble: “this Freudian family nexus.”* New York: Peter Lang, 1998. Print.
- Choe-Wall, Yang-hi. Ed, Intro & Trans. *Memoirs of a Korean Queen by Lady Hong*. London and Boston: Routledge & Kegan Paul Inc, 1985. Print.

- Drabble, Margaret. *A Summer Bird-Cage*. 1963. London: Penguin Books, 1967. Print.
- . *The Millstone*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1965. Print.
- . *Jerusalem the Golden*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1967. Print.
- . *The Waterfall*. 1969. London: Penguin Books, 1971. Print.
- . *The Needle's Eye*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1972. Print.
- . *The Middle Ground*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1980. Print.
- . *The Radiant Way*. London: Weidenfeld and Nicolson, 1987. Print.
- . *The Red Queen: A Transcultural Tragicomedy*. London: Viking, 2004. Print.
- . "Writing for Peace: Peace and Difference: Gender, Race, and the Universal Narrative." *Boundary 2*. State University of New York. Spring Vol. 34 (1) 2007: 215–225. Print.
- Frankova, Milada. "The Queen: Margaret Drabble's (Auto) Biographical Pastiche." *Brno Studies in English*. Vol. 37, No. 2, 2011: 79–86. Print.
- Haboush, JaHyun Kim. Trans & Intro. *The Memoirs of Lady Hyegyong: The Autobiographical Writings of a Crown Princess of Eighteenth-Century Korea*. Berkeley: California UP, 1996. Print.
- Hardin, Nancy S. "An Interview with Margaret Drabble." *Contemporary Literature*. XIV. 3 (Summer 1973): 273–295. Print.
- Hardy, Thomas. *Tess of the d'Urbervilles*. 1891. Intro. P.N.Furbank. London: Macmillan, 1974. The New Wessex Edition. Print.
- . *The Collected Poems of Thomas Hardy*. London: Macmillan, 1970. Print.
- . *The Dynasts: An Epic-Drama*. 1903, 1905, 1908. Intro. Harold Orel. London: Macmillan, 1978. Print.
- "Interview with Margaret Drabble, *The Red Queen*." Harcourt Trade Publishers. 15 Oct. 2011. <http://www.harcourtbooks.com/authorinterviews/bookinterview_Drabble.asp>
- Lee, Young-Oak. "An Interview with Margaret Drabble." *Contemporary Literature*. Winter Vol. 48 2007: 477–498. Print.
- Miyoshi, Masao. "Writing Across Boundaries and Transgression for Peace: Preface."

Boundary 2, State University of New York. Spring Vol. 34 (1) 2007: 209-213. Print.
Preussner, Dee Johnston. "Talking with Margaret Drabble." *Modern Studies*, Vol. 25,
1979: 563-577. Print.

拙著『フェミニズムとヒロインの変遷 — ブロンテ、ハーディ、ドラブルを中心に』
京都、世界思想社、2011. Print.

[Book Review]

Eder, Richard. "The Queen and I." Rev. of *The Red Queen*, by Margaret Drabble. *The New York Times*. 10 Oct. 2004:15. EBSCO. Doshisha Women's College of Liberal Arts Lib. 20 June 2012. <<http://web.ebscohost.com/ehost/detail?vid=4&hid=9&sid=ba9979c-e9f2-459b-9130->>